

南阿蘇における温泉の変遷と その価値に関する考察

星野 裕司¹

¹正会員 熊本大学准教授 くまもと水循環・減災研究教育センター

(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1)

E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp

我が国において、温泉入浴は身近で快適な水体験として長い歴史を有している。自然災害大国に暮らす私たちにとって、温泉とは、自然の脅威の表裏の関係にある大いなる恵みと考えられる。温泉の歴史を理解することは、自然の脅威との付き合い方、恵みの享受の仕方を理解することであり、その理解は、人々と自然との関係のあり方について、大きな示唆を与えるものになるのではないかと考えている。そこで本研究では、熊本地震によって大きな被害の出た南阿蘇村の温泉を対象として、その変遷を整理し、温泉に関する文献や議論を踏まえつつ、その価値について考察する。

Key Words: hot springs, Minami-Aso Vilage, historical research, trasion, value

1. はじめに

平成 28 (2016) 年 4 月 14 日および 16 日に発生した熊本地震は、熊本城や阿蘇神社を始め、あらゆる観光地に大きな被害を与えた。地震から約 2 年が経ち、徐々に元の姿を取り戻しつつある現在でも、未だ復興の途上である。特に観光が主産業である南阿蘇村は、阿蘇大橋崩落や道路の通行止め、鉄道の復旧未定など今もお厳しい状況にある。南阿蘇村は、阿蘇山の恩恵を受けた温泉や登山が有名であったが、垂玉温泉や地獄温泉など、古くからの温泉地は復興のめどは立っていない状況である(写真-1)。昭和 9(1934)年に国立公園指定、平成 21(2009)年に日本ジオパーク認定、平成 26(2014)年に日本で 7 ヶ所目の世界ジオパークに認定された南阿蘇村においては、今までの歴史や自然を上手く引き継ぎながら復興することが重要であるといえる。

また、湯治として古くから日本人に親しまれている温泉は、洗濯場や調理にも活用され、その地域の重要な自然の恵みであった。さらに温泉は、温泉旅館や足湯として観光にも活用されてきた。近年では地熱発電の開発や湯〜園地計画などの新たな温泉の利用方法が出現し、温泉地への関心はますます高まっている。しかし現在、全国の延べ宿泊利用人員は増加傾向にある一方で、宿泊施設および収容定員は年々減少している¹⁾。また日本は自然災害大国であり、火山と関係の深い温泉は自然災害とは切っても切り離せないものである。

そこで本研究では、南阿蘇村における火山性の温泉地を対象とし、温泉の歴史を辿ることで今現在見落としているかもしれない利用方法などを整理・考察し、今後の温泉の在り方を議論するための基礎資料となることを目的とする。



写真-1 被災した金龍の滝と垂玉温泉の源泉

2. 研究の位置付け

温泉に関する研究では、小森らの温泉地の特性や宿泊機能の変化パターンなどから全国の温泉地の盛衰について分析する研究²⁾や、山田らの地理的条件や形成過程による温泉地の分類から地域特性を扱った研究³⁾がある。

南阿蘇に関する研究では、黒田の国立公園指定の経緯を軸に阿蘇山観光登山の歴史的な変遷に関する研究⁴⁾や、岡山らの阿蘇くじゅう国立公園指定時における区域指定の経緯と草原景観の評価に関する研究⁵⁾がある。また、藤田の南阿蘇における鉄道を基軸とした地域形成史に関

する研究⁹⁾もある。

加えて、岡村によるユニークな論考を紹介したい⁷⁾。この「イーハトーブ温泉学」は東北有数の温泉地帯に隣接する花巻で短い一生を過ごした宮沢賢治の文学において、温泉に関する直接的な文学的言及は少ないにもかかわらず、〈温泉的想像力〉が様々な影響を与えていたのではないかという仮説を様々な角度から論証するものである。

当論考は、南阿蘇という一つの地域の温泉に限定して、その歴史を整理しつつ、温泉が有するかもしれない潜在的な価値について考察するものである。

3. 南阿蘇の温泉の概要

(1) 南阿蘇村の概要

現在震災復興に取り組んでいる熊本県阿蘇郡南阿蘇村に存在している・存在していた温泉を研究対象とする。阿蘇カルデラの南部、阿蘇五岳と外輪山に囲まれた南郷谷に位置する南阿蘇村は、平成 17 (2005) 年 2 月 13 日に旧白水村・長陽村・久木野村が合併して誕生した。中央を東から西へと流れる白川の両側には、住宅地、商業地、耕地の大部分が広がり、展望性のある田園風景となっている。標高 600m 以上は、その大部分を山林、原野で占め、北は阿蘇山上、草千里、火口原を結ぶ線上で区切られている。西の立野火口瀬近くが阿蘇外輪山の切れ目でカルデラの入り口となっており、ここで白川が阿蘇谷を北から流れてくる黒川と合流し、熊本平野へと下っていく。南は南外輪山分水嶺の北傾斜地で西部俵山一帯の高原地域までおおよび、低地は東の水源地域から西へと約 300m の標高差がある。平成 30 (2018) 年 1 月 4 日現在、人口約 1 万人・面積 148km² の地域である。

(2) 南阿蘇の温泉

南阿蘇村の温泉の変遷を表-1および表-2として巻末に示す。温泉に関する出来事について調査した結果、災害や交通が深く関係していることがわかったため、「温泉(赤)・災害(緑)・交通(青)・その他(白)」に表の項目を分類し整理した。南阿蘇において、文献に残っている最初の出来事として記述とされているのは湯の谷温泉についてである。そして南阿蘇に存在する・存在していた温泉の発見された順番は「湯の谷・垂玉・地獄・栃木・戸下」とされている(図-2)。すべての温泉に共通している特徴は、いつの時代もよく災害が発生し、その都度素早く復旧・復興していることである。また、豊肥線熊本―肥後大津の開通によって熊本方面から旧長陽村への温泉客が増加し、軽便鉄道宮地線全線の開通によって旧長陽村の五温泉への入浴客の増加をもたらした。さらに南阿蘇鉄道高森線が開通したことで、下田駅から

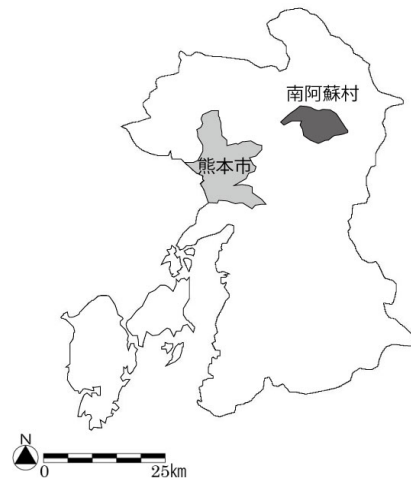


図-1 南阿蘇村の位置

は垂玉温泉・地獄温泉への近道になり、長陽駅からは栃木温泉が近く、また阿蘇登山と鮎帰りの瀧の探勝にも便利になった。そして温泉地に入浴客を運ぶ手段として南阿蘇で初めて自動車(乗合バス)が導入されたことなど、インフラが整備されることで温泉客が増加した。南阿蘇の温泉は、修学旅行先や観光場所、登山の休憩所としてあらゆる人が訪れる場所であった。

以上より、5つの温泉についてより深く変遷を辿ることで、南阿蘇村の温泉の大きな特徴が発見できると考えられる。

4. 5つの温泉について

この章では、「湯の谷・垂玉・地獄・栃木・戸下」の5つの各温泉について3章で作成した表-1, 2から温泉ごとに事項を抽出したのち、さらに追加資料(参考資料20~32)を用いて、明治から平成までの期間について旅館の変遷を整理し、詳しく記述する。また、5つの温泉の位置図を図-3に示す。平成29(2017)年発行の国土地理院地図をベースとし、南阿蘇村観光PR事業実行委員会が発行している「南阿蘇村 トレッキング・登山マップ」を参考に「温泉・駅・滝および水源・主要道・トレッキングルート・その他の温泉をつなぐ道」を地図上に加えた。

(1) 湯の谷温泉

a) 湯の谷温泉の歴史

湯の谷温泉は鎌倉時代の頃から存在していたとされ、南北朝時代永和/天授2(1376)年に阿蘇山上の霊場古坊中の坊湯として当時の僧たちに保養の場などとして使用されていた。この出来事が南阿蘇の温泉の文献における最初の記述であるとされている。同温泉は阿蘇山の配下、阿蘇の豪族阿蘇氏の支配下にあったことを意味しており、

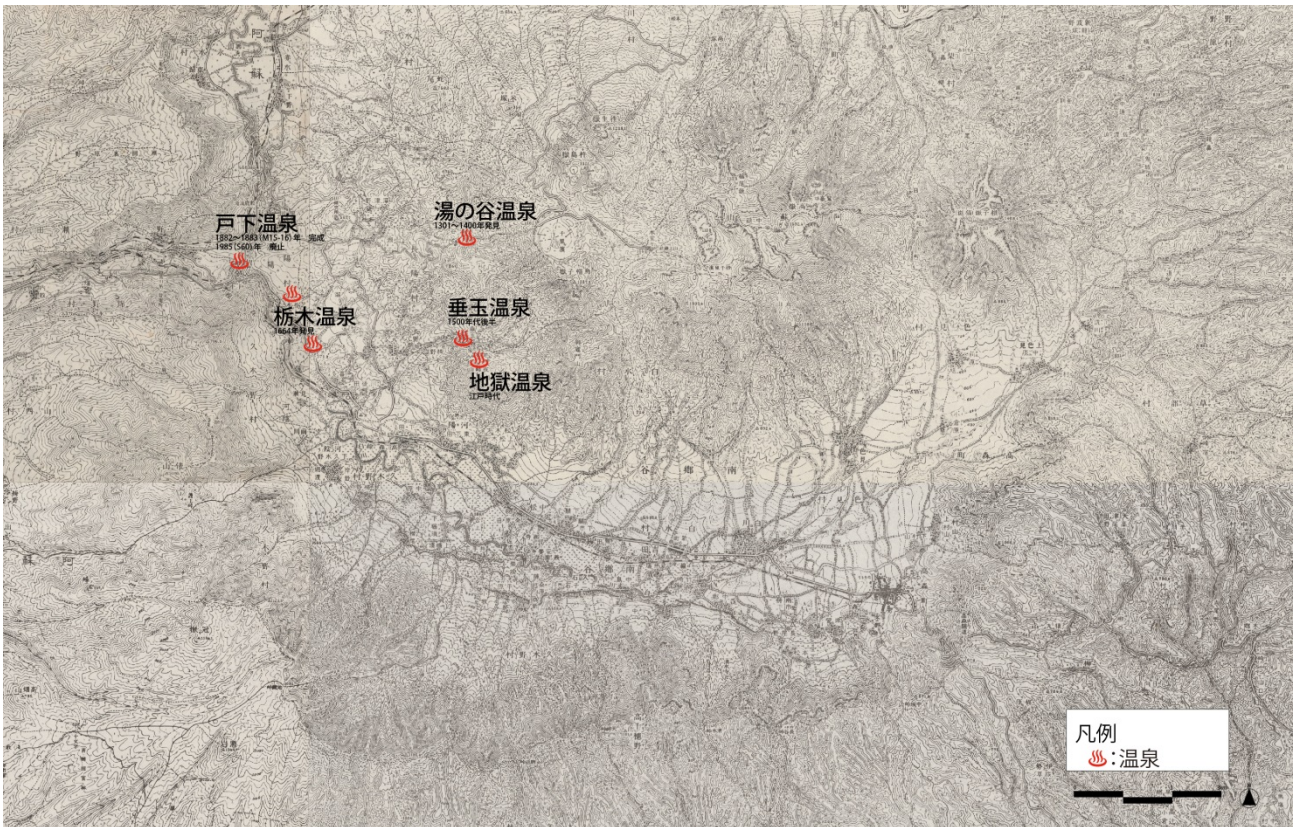


図-2 明治初期の南阿蘇周辺地図 (参考文献 22 を基に筆者作成)

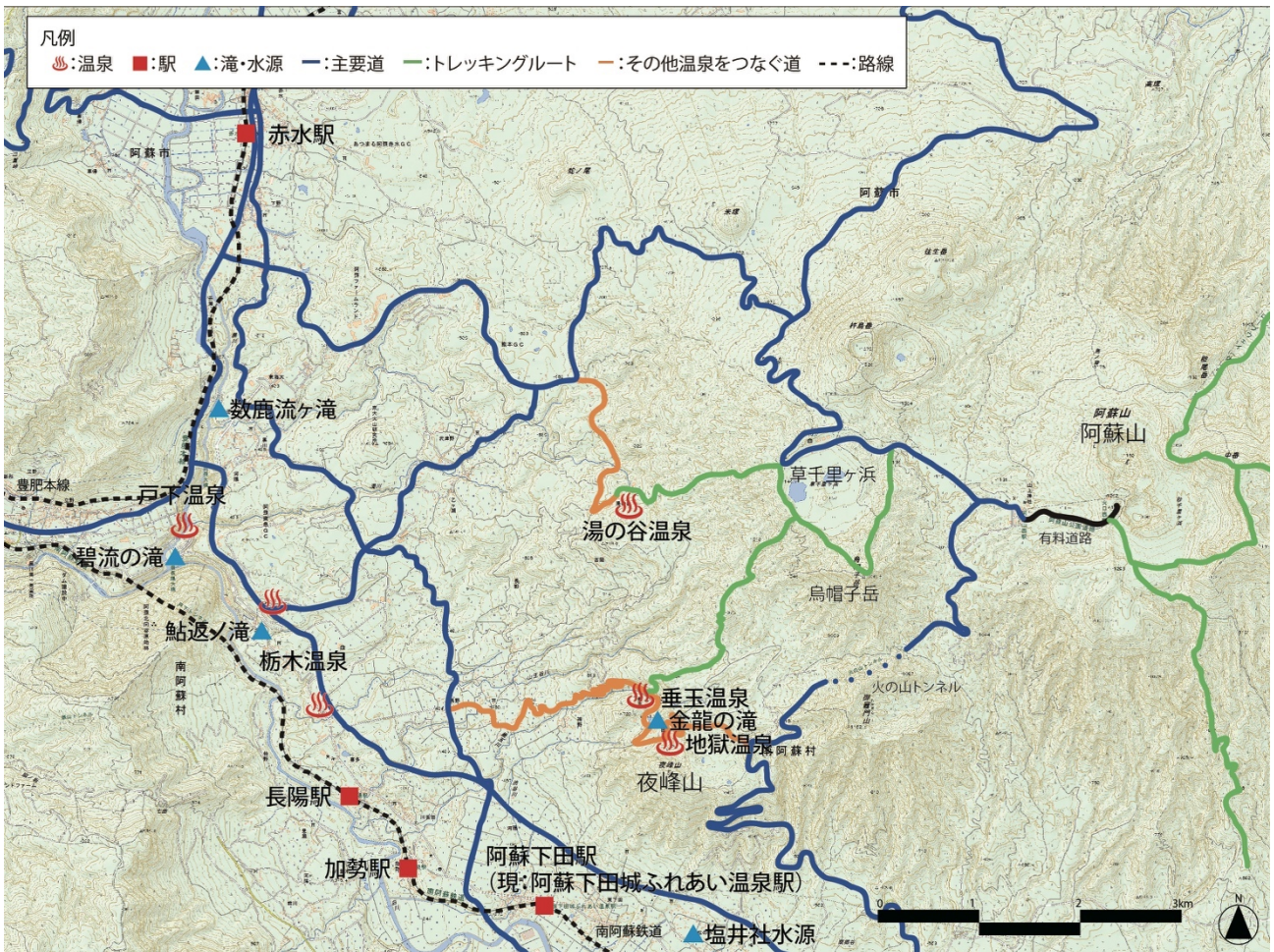


図-3 5つの各温泉の位置図

当時から阿蘇地域の重要な温泉地であった。

温泉が初めて営業が開始されたのは宝暦9 (1759) 年である。そして明和5 (1768) 年5月6日に温泉仕立てが命じられ、その年の12月に建設が始まりその年の内に温泉の仮小屋が完成し、入湯やその他の規則が定まった。江戸時代は「本陣・阿蘇社家の間・土席の間」などが設けられており、身分によって入湯の場などに違いがあったとされる。翌年の1月には入湯可能となり、さらに現代の旅館といえる湯小屋が6月に完成し、江戸時代が終わる頃には温泉の規模が拡大され湯坪が複数となった。

文化13 (1816) 年6月には湯の谷大変と言われる水蒸気爆発が発生し、現在までに水蒸気爆発3回、ガス爆発1回、暴風雨1回、水害1回、地震1回の計7回の災害が発生している。

昭和14 (1939) 年1月には温泉を採取するためにボーリングが数本掘られた。その際噴出した熱湯は同年の3月末より間欠泉に変化し、その後噴出は止まっている。昭和51 (1976) 年には湯量不足を補うために新しい泉源開発をおこなった。

b) 湯の谷温泉の旅館の変遷

明治では、明治14 (1881) 年4月に発生したガス爆発の噴火後、旅館の位置を移して再建をおこなった。戸下・栃木・赤水を起点とする阿蘇登山の中継点で登山客が疲れを癒しており、泉質は3種類あった。

大正では新湯および旧湯の2種類あり、旧湯は自炊客を主としていた。大正7 (1918) 年に長野惟継によって広大なホテルが建てられた。阿蘇の温泉の中で最高地点に所在しており、風景の雄大で清涼な気候が味わえるとされていた。また赤水駅からの客も多く存在した。

昭和にはさわやかな高原の緑と涼風を求めて避暑や研修に多くの人が訪れた。県外では福岡県を筆頭に関東・関西とその範囲は広く、県内外からたくさんの観光客を迎えた。そして昭和10 (1935) 年に観光ホテルの建設が決定し、大正7年に竣工した旅館を大正13 (1938) 年に熊本県が買収し、大正14 (1939) 年に観光ホテルと和風の日本旅館蘇峰館を新築した。観光ホテルは平成11 (1999) 年に閉館するまで計5回天皇家の方々のご宿泊された場所であった。蘇峰館は昭和54 (1979) 年4月に古くなったため40年の歴史に幕を閉じた。温泉は掘削によるものの他、坊主地獄・餅搗地獄・無名地獄・白池地獄・雀の地獄があり、間欠泉もあったが今は湧出していない。立野火口瀬を通してはるかに金峰山・雲仙を望むことができ、中央火口丘に最も近く火口見物には便利であった。

平成には、くまもと阿蘇湯の谷リゾートホテル&ゴルフというものが存在するが熊本地震の影響により現在は営業停止中である。

c) まとめ

湯の谷温泉は、湯の谷大変という大きな災害や、天皇家の方々の宿泊先として重宝されていた阿蘇観光ホテルが存在していた土地である。また5つの温泉の中で唯一泉源開発をおこなっている土地であり、文献に残っている一番最初の出来事として、記述されている。また5つの温泉の中で文献資料が一番残っており、南阿蘇村において重要であったことがわかる。

(2) 垂玉温泉

a) 垂玉温泉の歴史

天正年間 (1573年～1592年) に金龍山垂玉寺という観音堂があったと伝えられており、垂玉温泉はそのころから利用されていたと考えられる。江戸時代享保から寛保の3年の間 (1744年～1747年) に2度山崩れが発生し、その後現在までに暴風雨1回、火災1回、豪雨災害1回、水害1回、地震1回の計7回災害が発生している。災害が発生する度に再興願を提出し、再興がおこなわれた。宝暦元年 (1751年) 6月には、「南郷布田手永の内、垂玉、湯の谷、北里の内黒川、この三ヵ所にて明礬仕立試の結果、垂玉、黒川に仕立仰付らる」という記述の資料が残っている。明礬仕立試という言葉の詳細はわからなかったが、地名からおそらく温泉に関する記述であると推測される。慶応元年 (1865年) 4月には熊本の藩主の親族と家来が訪れるということで、温泉とそこへ通ずる道路などの補修工事がおこなわれた。

明治には山口廣記氏によって旅館が新築され、それと同時に旧長陽村喜多に通じる車道 (図-3、垂玉温泉から西側のオレンジ色の道) も建設された。また明治32 (1899) 年5月および34 (1901) 年と2度も修学旅行先に指定され、多くの人が垂玉温泉を訪れた。

昭和には鉄道省門司鉄道宮地線として立野高森間が開通し登山帰りの客も多く、トレッキングルートの一部としても利用されていた。昭和33 (1958) 年7月17日には金龍橋の完工式、渡初め式がおこなわれ、昭和38 (1963) 年12月1日には金竜荘の落成式がおこなわれた。また平成4 (1992) 年には垂玉温泉山口旅館の敷地内で「五足の靴」の記念碑の除幕式がおこなわれた。ここで「五足の靴」とは、明治40 (1907) 年に雑誌明星を主宰する与謝野鉄幹が、まだ無名であった北原白秋、太田正雄 (木下杢太郎)、吉井勇、平野万里ら学生詩人たちを連れて九州各地を旅した際の行記である。5人は明治40 (1907) 年8月14日の朝から馬車で阿蘇探訪に向かった。栃木を通過したところで馬車を降りて垂玉の湯まで歩き、その土地の女に案内されて垂玉の湯に到着した。宿泊した旅館は「山口旅館」で当時の主人は山口広記という人であった。この旅館は堅固な石垣、黒い山門など、昔の豪族の城廓に似ており、垂玉の湯という名前や古色蒼然とした長屋や楼閣に一行は「大に気に入った」

と感歎していたとされる（写真-2）。



写真-2 被災した石垣

b) 垂玉温泉の旅館の変遷

明治では 33 年に 1 旅館を建て替え、自炊棟が 2 棟存在した。温泉は新旧の 2 湯あり、海の魚は食前にあがらなかったが鶏肉や鶏卵は手に入りやすかった。2400 尺（約 727m）の高所に温泉があったため暑さを知らず、馬車の便があった。

大正では垂玉館という旅館が存在し、温泉は明治と同じく新旧の 2 湯があった。設備が完全であり入浴客が多く、さらに道が悪かったが馬車は通っていた。

昭和では岩湯・油湯・新湯・元湯の 4 湯あり、いずれも自然湧出であったとされており、晩春から初秋の候が一番よい入湯季節であった。自動車を旅館の玄関に横付けでき、さらに山腹の中間にあるため登山にも下山にも極めてよい場所であった。また垂玉瀧の下流右岸に玉泉山垂玉寺というお寺が祈願所となっている地にあった。

平成では金龍の滝を眺めながら入浴のできる混浴露天風呂滝の湯、茅葺き半露天かじかの湯が男女各 1 室、大浴場天の湯が男女 1 室が造られた。阿蘇の火口へ約 40 分かかり、その他の阿蘇のさまざまな観光施設へ 30 分から 1 時間圏内に立地している。また熊本市内へは約 1 時間の距離であり、最寄駅は阿蘇下田駅である。山口広氏が経営していた頃から現在 8 代目の山口雄也氏まで経営が続いていたが、熊本地震の影響で現在は営業停止中である。

c) まとめ

垂玉温泉は 5 つの温泉の中で唯一修学旅行先に指定されており、また五足の靴で有名な詩人達が訪れた地として有名である。また金龍の滝を眺めながら入浴できる温泉として有名であり、自然豊かな立地にあることがわかる。

(3) 地獄温泉

a) 地獄温泉の歴史

発見時期は不明であるが、江戸時代頃から湯治場として栄えた。5 つの温泉の中で唯一入浴以外の温泉の使用 방법이文献に記載されており、苧（からむし）という衣服に使用される材料を地獄温泉の蒸気で蒸したとされている。江戸時代文化 5（1808）年には再興の為として掟が出され、入湯は武士・僧侶・山伏などに限られており、町人は認められていなかった。また、天保 3（1832）年には岩本徳三によって宿が創設された。

今から約 1 万年前の旧石器時代および約 4500 年前の縄文時代には、地獄温泉付近で大きな水蒸気爆発があったとされ、明治 7（1874）年 6 月 7 日の晩に湯小屋が焼失した。その他にも 5 つ全ての温泉に被害があった暴風雨、六・二六水害および熊本地震が発生した。

昭和 39（1964）年 4 月には地獄—垂玉温泉間の観光道路（図-3、垂玉—地獄間のオレンジ色の道）が完成し、昭和 54（1979）年 5 月には地獄・垂玉の泉源温度等の定期観測が開始された。

b) 地獄温泉の旅館の変遷

明治は旅館 1 棟・自炊棟 2 棟あり、温泉は 2 種類であった。回転式のガラスケースに新聞を掲示して入浴客の便宜を図っていた。2400 尺（約 727m）以上の高所に所在し、南郷谷の火口原を一望でき絶景を見ることができた。熊本まで 10 里（約 39km）、栃木温泉まで約 1 里（約 3.9km）であり、道路も険悪であったが改修により不便は解消された。

大正は旅館が 1 軒であり、岩本尚氏の経営で自炊客が主であった。また温泉は鶏卵がすぐ茹で上がってしまうほど高温であったと伝えられる。大正末に野田三蔵氏がこの旅館の買収をおこない、入浴設備を整備し、これを野田恒子が継承し現在も存在する清風荘と名付けた。

昭和は元湯・新湯・雀の湯の産油あり、元湯と新湯が混浴として使用されていた。夜峰山の麓の爆裂火口の下に噴出した巨巖の間から湧きわめて高度の温泉であった。熊本市およびその周辺、南郷谷一円・宮崎県からも高齢者が季節を問わずに訪れる湯治客が多かった。

平成には湯船の底から源泉が湧き出す雀の湯があり、他に元湯・新湯・露天岩風呂・仇討の湯がある。あえて改築をおこなわず、明治時代からの佇まいを大切に清風荘を経営していたが、熊本地震の影響で現在は営業停止中である。

c) まとめ

地獄温泉は 5 つの温泉の中で唯一入浴以外の使用 방법이文献に記載されている温泉である。また江戸時代の頃には入湯の掟が定められ、身分によって入湯に制限が存在した。現在存在する地獄温泉清風荘は明治時代からの佇まいを今も大切に守っている。

(4) 栃木温泉

a) 栃木温泉の歴史

栃木温泉には本温泉と新温泉と呼ばれるものがある。江戸時代寛文 4 (1664) 年細川藩士が、狩りの途中に手負いの猪が白川の溪流で傷を癒しているのを見つけた。これが栃木温泉本温泉の発見だと伝えられているが、高月權之助の発見によるという説もある。宝暦 7 (1757) 年には藩庁の管理下にあり、藩の役人が温泉を管理し営業していた。宝暦 10 (1760) 年には入湯者が多く、湯 1 ヶ所では老人婦人共に思うように入湯できないため、新たに湯口を 2 ヶ所造るよう、藩庁に指示された。

明治 21 (1888) 年には高月氏から小山雄太郎氏に経営が受け継がれ、谿香館と呼ばれる旅館が存在した。さらに明治 28 (1895) 年 3 月 7 日に荒牧輝親氏によって発見された温泉が新温泉となり、積翠館という旅館が別に建てられた。明治 40 (1907) 年には、垂玉温泉と同様に与謝野鉄幹を始めとする一行が栃木温泉にも宿泊した。彼らは明治 40 (1907) 8 月 15 日に、その土地の案内者を頼み阿蘇登山をおこなった。しかし下山する際に案内人が道に迷ってしまい、湯の谷へ行く道を発見するまで、下山し始めてから 3 時間半もかかっていた。湯の谷温泉で休憩し案内人に 25 銭 (現在の価値にして約 5000 円) 払った後、栃木温泉に宿泊した。その日は浴客が 120 人もおり、一行は (現小山旅館) 本館の向かい側の散髪屋と駄菓子屋とを兼ねた 2 階に宿泊した。

大正 12 (1925) 年 4 月には本温泉に約 10 万金を投じて四層樓の新館を建設し、昭和に入り新湯に宏館を新築した。また浴室を改造し、白川沿岸の懸崖を利用した屋舎を設けた。

六・二六水害発生から 1 週間後には営業を再開しており、災害調査団一行を客として迎え入れ、発生から 5 年後に復旧が完了した。その他明治 32 (1899) 年 8 月 10 日に暴風雨による被害があり、平成 28 (2016) 年 4 月 14 日、16 日に発生した熊本地震の被害により現在も営業停止である。

b) 栃木温泉の旅館の変遷

明治は 3 湯の湧泉があり、本温泉の谿香館、新温泉の積翠館の 2 軒存在した。谿香館は敷地内に商店もあり酒・味噌・醤油などの日用品が全て揃った。積翠館は谿香館よりも小規模であったが、建築が新しいため潔麗であった。

大正では古湯の小山旅館と新湯の荒牧旅館が存在し、湧出量は阿蘇の諸温泉のなかで一番であった。温泉付近には名勝である鮎返りの滝があったが、水力発電所の建設によって壮観を崩された。大正 12 (1925) 年 11 月 26 日から 28 日の 3 日間には若山牧水夫妻が滞在した。

昭和でも大正と同じく小山旅館と荒牧旅館が存在していた。しかし立野ダムに沈むため昭和 62 (1987) 年 8 月

6 日に荒牧旅館が移転新築し営業を再開した。また同じく立野ダムに水没してしまうため平成 5 (1993) 年 11 月 27 日に移転新築し、落成式をおこない営業を再開させた。湯量が実に豊富であり、大量の温泉を白川に捨てていたほどである。登山の往復、地獄・垂玉温泉を巡るお客の宿泊、湯の谷下山の客にも好適な浴場であった。夏は避暑とプール利用を兼ねた家族連れ、秋の紅葉の頃は団体客で賑わった。高校や大学のスイミングクラブの合宿が相次ぎ観光湯治客に交じって若者の姿も多かった。また阿蘇山の登山口に位置していたため、登山客が翌日の登山のための英気を養い、疲れを癒していた。阿蘇登山者の登山準備地、下山者の休息地として発展した。

平成 7 (1995) 年 7 日に温泉旅館朝陽が完成し落成式がおこなわれた。そのため平成では荒牧旅館と旅館朝陽の 2 軒あるが現在は熊本地震の影響により営業停止中である。小山旅館も旅館自体は存在しているが、情報を収集できなかったため現在の状況は確認できていない。

c) まとめ

栃木温泉は 5 つの温泉の中で唯一泉源を分けて利用している温泉である。また唯一、人ではなく動物が温泉を利用していたことから発見された温泉である。旅館としては立野ダム建設のため廃業の可能性もあったが、旅館を移設し、熊本地震発生まで現代でも利用されていた。

(5) 戸下温泉

a) 戸下温泉の歴史

戸下温泉は明治 15 (1882) 年から 16 (1883) 年に赤峯正起らの尽力により栃木温泉の泉源を引いて浴場を造ったとされる。

また明治 32 (1899) 年 8 月 10 日に発生した暴風雨により温泉近くにあった眼鏡橋を架けるための工事用下橋ができたばかりに流出した。さらに六・二六水害により壊滅的な被害を被った。

そして立野ダム建設工事のため昭和 60 (1985) 年の春に姿を消した。

b) 戸下温泉の旅館の変遷

明治では栃木温泉の湯を木管を通して引き営業しており、長陽館・柳屋・紅葉館・長栄館の 4 軒と自炊棟 2・3 棟あったとされる。夏の朝悠は涼しく、日中も熊本の炎熱に比べると 10 度程低く別天地であった。また、5 つの温泉のなかで熊本市に最も近く、交通の便がよかった。さらに熊本市まで馬車および人力車の便があった。

大正では栃木から温泉を木管および鉛管で引いており、碧翠楼という旅館が存在した。綺麗な浴室と旅館が新築され、ビリヤードの設備まで備えられていた。そのため阿蘇諸温泉の中で最も完備されているものの一つであると言われていた。

昭和でも約 2km 上流の栃木温泉から温泉を引いており、

碧翠楼と三代ホテルが存在していた。碧翠楼が昭和 33 (1958) 年 7 月 21 日に開設 75 周年を迎え、記念式および祝賀会がおこなわれ、その翌年に三代ホテルが完成し落成式がおこなわれた。熊本市に一番近い阿蘇の温泉地として湯治客や観光客で賑わい、外国人の客も多かった。またそして明治の趣きを残す温泉であるが、春は桜、夏は避暑にプール、秋は紅葉に訪れる人が多かった。阿蘇の温泉中では交通の便に恵まれており、日帰りが可能であった。しかし立野ダム建設工事のために昭和 60 (1985) 年の春に姿を消した。

c) まとめ

戸下温泉は 5 つの温泉の中で唯一、現在は存在しない温泉であり、一番歴史が浅い温泉である。しかし宿が開館していた頃は熊本市に南阿蘇の中で一番近い温泉地として、観光地や避暑地として大変栄えており、外国の訪問者も多かった。

(6) 交通の変遷と温泉

5 つの温泉の変遷をそれぞれ整理した結果、各温泉があらゆる資源と深く関わり合っていたことがわかった。特に交通の変遷との関係に焦点を当てると、大正では豊肥線熊本―肥後大津および軽便鉄道宮地線全線が開通し、旧長陽村の五温泉への入浴客の増加をもたらした。さらに温泉地に入浴客を運ぶ手段として南阿蘇で初めて自動車(乗合バス)が導入され、昭和では南阿蘇鉄道高森線が開通し、インフラが整備されることで温泉客が増加したことがわかる。

また登山に深く関わっていることが黒田によって述べられている⁴⁾。大正 6 (1917) 年に鉄道宮地線が開通したことで登山客が飛躍的に増加し、坊中(現阿蘇駅)からの登山ルートが最も容易で、時間、距離ともに経済的であるとされていた。坊中から登り、湯の谷、栃木等、南郷谷の温泉地の方面へ下る経路が多く利用されていた。しかし、登山の記録を残した外国人はいずれも湯の谷温泉、地獄温泉、栃木温泉つまり 5 つの温泉周辺の道を経由し、登山をしていたと考えられる。素朴で純粋な日本の生活を体験するには栃木温泉は良いと評価する人もいれば、栃木温泉、湯の谷温泉を経て阿蘇山に登り、熊本平野を一望できる湯の谷温泉からの風景は阿蘇の温泉の中で最も良いと述べている人もいた。

このようにインフラが整備され、登山が盛んになるにつれて 5 つの温泉は盛んになった。そして温泉が盛んになるにつれさらにインフラや登山道の整備が進み、現代の南阿蘇の温泉を形成していった。

5. 地域の水系・水循環のマネジメントとまちづくりにおける温泉の価値

最後に、水を中心とした地域のマネジメント・まちづくりにおける温泉の価値について考察してみたい。

明治に入って、栃木温泉から泉源を引いて開設した戸下温泉以外の 4 つの温泉に共通して言えることは、藩が経営・管理するほどに湯治場として栄えていたということである。もちろん、これは日本全国の古温泉場と共通することだろう。しかし、一般に湯治には、心身の疲れを癒す医学的機能ばかりではなく文字どおり裸になって語らい、寝食をともにすることによって湯治客どうしの親密なコミュニケーションをもたらすという社交的機能があることが指摘されている。いわば、非日常なアジールのな場としての性格である。近代的なインフラの整備によって、観光地としてスムーズに発展していく母胎として、温泉が本来このような場としての性格を有していたことを確認することは重要であろう。

一方、5 つの温泉は全て、近代に入って阿蘇登山の休憩地として機能していることは前述した。その源も近世以前に遡ることができる。湯の谷温泉、垂玉温泉には宗教的な起源があることが史実によって確認できる。これは、阿蘇山における修行(修験道)の拠点であったと考えられ、近世的な登山(山の交通ネットワーク)と強い関連があったと想定することができる。加えて注目されるのは、栃木温泉の起源における猪の伝説である。八岩まどかは、実際に動物が山中の自然湧出の温泉に浴することがあるという理由に加えて、象徴的・宗教的理由を挙げている。古代の人々は温泉を天の恵み、神の恵みと受けとめ、こうした動物を神の使いと考えたと述べている³⁾。こうした考察を踏まえながら、岡村は、「温泉は、人と人との交流をはかる社交場であるばかりでなく、自然ないし神仏の霊的エネルギーとの交流をはかる霊場でもある」と述べる⁷⁾。つまり、温泉は人と人だけではなく、人と自然を結ぶ重要な結節点でもあったのである。

以上のように考えると、南阿蘇の 5 つの温泉が全て、自然災害に数多く見舞われつつも、その都度復興しているという事実新しい光が当てられるのではないかと考えられる。つまり、自然の恵みの享受である温泉体験が、自然の脅威と表裏一体であるということ強く体感できる場でもあるということである。温泉法において温泉は、「地中からゆう出する温水、鉱水及び水蒸気その他のガス(炭化水素を主成分とする天然ガスを除く。)で、別表に掲げる温度又は物質を有するもの」と定義されているが、地中のエネルギーによって変質した水が地上に表出てきたものである。すなわち、自然が有する、人にとっては恵みにもなり、脅威にもなる不可視のエネルギーが触知可能なものとして表出てきた特異点として、温泉を位置づけることができるだろう。その

エネルギーに身体を浸すことが、医療的にも社会的にも人々にエネルギーを与えてきたということだろう。

温泉は、水施設単体としては独立した点的なものであるが、大きく深いネットワーク構造の、身体ごと体験可能な、特異点として存在している。当論考で試みたような温泉の価値の読み直しは、熊本地震からの復興を目指すと同時に、自然災害と共生し続けなき打てはならない南阿蘇の温泉地にとっても、重要な展望を示唆するのではないかと考える。

謝辞：当論考は、垂玉温泉山口旅館専務山口裕也氏が地震後、私の研究室を訪ねてきてくれたことに端を発する。また貴重な資料の提供もいただいた。加えて、当論考は松本佳子氏の卒業論文が基になっている。ここに謝意を表す。

参考文献

- 1) 環境省：温泉利用状況, 2015.
- 2) 小森美紗子, 十代田朗, 津々見崇：温泉の盛衰に関する基礎的研究, 日本都市計画学会 都市計画論文集, No-45-3, pp409-414, 2010.
- 3) 山田桐子, 宮崎均：温泉街における地域特性からみたまちづくりに関する研究—知己的条件ならびに形成過程からみた地域特性の傾向—, 日本建築学会計画系論文集, 第 73 巻, 第 626 号, pp819-826, 2008.
- 4) 黒田乃生：阿蘇山の確立公園指定の経緯と観光登山, ランドスケープ研究 (オンライン論文集), Vol.5, pp55-62, 2012.
- 5) 岡山俊直, 岡野隆宏：阿蘇くじゅう国立公園指定時における区域指定の経緯と草原景観の評価, ランドスケープ研究 (オンライン論文集), Vol.9, pp74-82, 2016.
- 6) 藤田将史：南阿蘇における鉄道を基軸とした地域形成史, 平成 24 年度修士論文.
- 7) 岡村民夫：イーハトーブ温泉学, みすず書房, 2008
- 8) 長陽村：長陽村史, 2004.
- 9) 岩本政教：熊本の温泉と休養地, 熊本日日新聞社, 1985.
- 10) 熊本県教育会阿蘇郡支会：阿蘇郡誌, 名著出版, 1973.
- 11) 本田秀行：阿蘇 南郷谷覚書, 1984.
- 12) 熊本県阿蘇郡長陽村河陽長陽村教育委員会：長陽村史資料 第四集, 2004.
- 13) 環境省/阿蘇くじゅう国立公園：<https://www.env.go.jp/park/aso/intro/index.html> (2018/1 現在) .
- 14) 力徳祥子：南阿蘇村を中心とした観光ネットワークに関する研究, 平成 23 年度修士論文.
- 15) くまもと阿蘇湯の谷リゾートホテル&ゴルフ：<http://aso-yunotani.co.jp/hotel/> (2018/1 現在) .
- 16) 垂玉温泉 山口旅館：<http://www.tarutama.jp/> (2018/1 現在) .
- 17) 地獄温泉 清風荘：<http://jigoku-onsen.co.jp/onsen/> (2018/1 現在) .
- 18) 栃木温泉 荒牧旅館：<http://www.aramaki-ryokan.com/> (2018/1 現在) .
- 19) 南阿蘇 栃木温泉 旅館朝陽：<http://www.minamiaso.co.jp/> (2018/1 現在) .
- 20) 南阿蘇村/村勢要覧が完成しました：<http://www.vill.minamiaso.lg.jp/soshiki/2/sonsei-youran.html> (2018/1 現在) .
- 21) 南阿蘇村温泉旅館組合 HP：<http://minamiaso-onsen.jp/index.html> (2018/1 現在) .
- 22) Gaihozu: Japanese Imperial Maps Japan 1:50,000/JAPANESE IMPERIAL MAPS：<https://stanford.maps.arcgis.com/apps/SimpleViewer/index.html?appid=733446cc5a314ddf85c59ecc10321b41> (2017/10 現在) .
- 23) ようこそ電子地形図へ：<http://dkgd.gsi.go.jp/dkgy/page1.htm> (2017/9 現在).
- 24) 岩崎重三ら：阿蘇山の地学的研究附録, 隆文官, 1907.
- 25) 阿蘇惟教：阿蘇の面影, 1912.
- 26) 角田政治：阿蘇大火山 附温泉勝地, 1922.
- 27) 哲堂廣田彌七：国立公園 阿蘇 熊本/天草 雲仙別府国際観光路 奥附, 1933.
- 28) 沼佐隆次：阿蘇国立公園, 1933.
- 29) 中村治四郎：阿蘇山, 中村英数学園, 1962.
- 30) 花岡伊之作：阿蘇案内, 花岡書籍雑誌店, 1930.
- 31) 一般社団法人みなみあそ村観光協会：<https://www.minamiasokanko.jp/> (2018/1 現在) .
- 32) 浜名志松：五足の靴と熊本・天草, 国書刊行会, 1995.
- 33) 八岩まどか・ヒューマンルネッサンス研究所：温泉と共同湯—ふれあいと癒しのコミュニティ, 青弓社, 1997

表-1 南阿蘇の温泉年表「旧石器時代～大正」(参考文献 8～19 を基に筆者作成)

時代	西暦	年号	月	日	出来事	参考文献番号		
旧石器	約1万年前				地獄温泉周辺で大きな水蒸気爆発	9		
縄文	約4500年前				地獄温泉周辺で大きな水蒸気爆発	9		
鎌倉	1301							
南北朝	1400				湯の谷温泉 存在	9		
南北朝	1376	永和/天授	2		湯の谷温泉	9		
安土桃山	1573 1592	天正年間			垂玉温泉	9		
江戸	1603 1868				地獄温泉について	9		
					湯の谷温泉について	9 10 11		
江戸					1664 寛文 4 栃木温泉 本温泉発見	9 10 12		
					1731 享保 16 垂玉温泉 山崩れのため潰れる	11		
					1744 寛保 4 元年 1 垂玉温泉 破壊	11 10		
					1747 4			
					1750 寛延 3 湯の谷温泉 発見	12		
					1751 元年 6 垂玉 明誓仕立の結果仕立仰付らる	13		
					1757 宝暦 7 栃木温泉 営業	9		
					1759 9 6 湯の谷温泉 営業開始	13		
					1760 10 12 栃木温泉 新たに湯口を作るように指示される	11 13		
					1767 4 4 湯の谷湯本見廻り付らる	13		
					1768	5	6 湯の谷に温泉仕立てが命ぜられる	11
							12 湯の谷温泉 温泉小屋の建設が進む	13
					1769	6	1 湯の谷温泉 入湯可能	11
							2 湯の谷湯小屋 運営につき種々示達す	13
					6 湯の谷温泉 湯小屋完成	11 13		
					1784 天明 4 栃木温泉 下小屋建て直し	13		
					1786 6 10 垂玉温泉 再興願を出す	11 13		
					1798 寛政 10 1 湯の谷湯亭仰せ付けらる	13		
					1806 2 12 垂玉温泉 再興	11 13		
					1807 4 4 湯の谷湯本見廻り付らる	13		
					1808 文化 5 地獄温泉 入湯の掟	10		
					1816 13 6 湯の谷大変	9 10 13		
					1823 文政 6 10 栃木温泉 本陣建替	13		
					1832 天保 3 地獄温泉 宿 創設	9		
1853 嘉永 6 7 湯の谷湯亭仰付らる	13							
1855 安政 2 地獄温泉 明誓制法ゆるさる	13							
1858 5 湯の谷温泉での水蒸気爆発	9							
1865 慶応 元年 4 垂玉温泉 熊本の藩主の親族と家来がやって来る	9							
明治					1871 4 6 湯の谷に異国人来り	13		
					7 鹿藩置県 断行	9		
					1874 7 6 7 地獄温泉 湯小屋焼る	13		
					1877 10 3 27 垂玉 地獄温泉 宿泊地になる	13		
					1881 14 3 20 湯の谷温泉での水蒸気爆発	9		
					1882 1 4 18 湯の谷でガス爆発発生	11		
					1883 15-16 戸下温泉 完成	12		
					1888 21 栃木温泉 本温泉 経営者交代	9		
					1895 28 3 7 栃木温泉 新温泉発見	12		
					1899	32	5 市制町村制の施行	8
							8 10 垂玉温泉 修学旅行先となる	9
					1900	33	暴風雨	9 13
							垂玉温泉 旅館が新築される	9 12
					1901 34 垂玉温泉 修学旅行先となる	9		
1907 40 4 28 垂玉温泉 薪小屋焼失	13							
大正					地獄温泉 清風荘について	11		
					1914 3 6 21 豊肥本線熊本～肥後大津 開通	9		
					1917 6 5 8 軽便鉄道宮地線全線 開通	13		
					1918 7 湯の谷温泉 広大なホテルが建てられる	9 10 11		
					1925 12 4 栃木温泉 本湯 四層楼 建設	12		
					11 26-28 栃木温泉 荒牧旅館 宿泊先となる	13		
					1924 13 長陽村へ自動車導入	9		

凡例【項目】■:温泉, ■:交通, ■:災害, □:その他 / 【温泉の名前】■:湯の谷, ■:垂玉, ■:地獄, ■:栃木, ■:戸下

表-2 南阿蘇の温泉年表「昭和～平成」(参考文献 8～19 を基に筆者作成)

時代	西暦	年号	月	日	出来事	参考文献番号		
昭和	1928		3	2	12	立野高森間 営業開始 (鉄道省門司鉄道支線として)	9 13	
				6	29	垂玉温泉 豪雨により崩壊	13	
	1929		4		修学旅行	9		
	1932		7	11	20	阿蘇温泉組合組織される	13	
	1933		8	2	20	道路拡張と路面改修工事起工式が行われる	13	
	1934		9	12	4	阿蘇国立公園指定	9 13	
	1935		10	11		湯の谷温泉 観光ホテル建設決定	13	
	1936		11	11	27	自動車阿蘇登山道開削起工式	13	
	1937		12	3	12	湯の谷温泉付近の道路及び土地を転売	13	
	1938		13	12	27	湯の谷温泉 阿蘇観光ホテル 竣工	11 13	
	昭和	1939		14	1		湯の谷温泉 省の地獄付近にボーリング中に、 熱湯高さ三十余尺噴出する 温泉を採取するためのボーリングが数本掘られた その内の1本は2.30メートルほどの高さへ噴き上げた	9 13
					3		湯の谷温泉 省の地獄付近に噴出した熱湯は三月末より閉歇温泉に 変化三〇分毎に熱湯を七十余尺も噴き上げる 閉歇となったその後時期や理由は明らかではないが 閉歇の噴出は止まっている	9 13
			4		阿蘇登山自動車道 第一期工事)竣工	13		
			7	22	阿蘇観光ホテル完成	9 13		
					和風の日本旅館 蘇峰館)を新築	11 13		
1940			15	10	30	土砂崩れ発生	13	
1944			19			観光ホテル・蘇峰館 九州産交会社の併合することになった	11	
1951			26	5		地獄温泉のキャンプ村 山小屋完成	13	
1952			27			湯の谷ゴルフ場 熊本ゴルフクラブ)第一工事竣工	13	
昭和		1953		28	6	26	六二六水害	9
					28		地獄温泉 送湯パイ修復	9
				7	3	榎木温泉 営業再開	9	
			4		垂玉温泉 再開	11		
	1954		29	4		湯の谷ゴルフ場 熊本ゴルフクラブ) 開場式が行われる	13	
	1955		30	4	15	バス 運行開始	13	
	1956		31			長陽村 再編成	8	
			8	1	阿蘇山 電灯がつく	13		
					榎木温泉 復旧完了	11		
	1958		33	4	14	阿蘇観光ホテル 宿泊先になる	13	
			7	17	垂玉温泉 金龍橋 完工式・渡初め式	13		
			21		戸下温泉 記念式・祝賀会	開設75年を迎え		
1959		34	8	13	阿蘇観光ホテル 宿泊先になる	高松宮妃		
		10	4	戸下温泉 三代ホテル落成式	13			
1960		35	9	23	湯の谷 熊本ゴルフ倶楽部 開場式	18ホールズ完成		
		3	20	阿蘇登山口 坊中駅)が 阿蘇駅)に改名	13			
1961		36	11	1	観光道路開通	湯の谷ゴルフ場と阿蘇登山有料道路とを結ぶ		
1962		37	5	13	阿蘇観光ホテル 宿泊先になる	皇太子ご夫妻南九州ご旅行		
1963		38	12	1	垂玉温泉 竜巻荘) 落成式	13		
1964			4		観光道路完成	地獄・垂玉温泉間		
		7	31	阿蘇観光ホテル第一別館 落成式	8月1日から営業開始			
昭和	1965		40	1	20	登山道路 景観観光有料道路)完成 開通式	下野 湯の谷(入口)からの道 21日から営業開始	
				1		九州産交バス運行開始	赤水・湯の谷-阿蘇山上線	
				8	8	阿蘇観光ホテル 完成・開業	13	
				30		長陽村国民プール完成 落成式・プール開き	13	
1970		45	7	1	日本道路公団阿蘇有料登山道路が県に引き継がれる	坊中-阿蘇山上間の有料登山道路が県に引き継がれ 赤水・米塚間の景観阿蘇登山道路と一本化され 料金が徴収されることとなる		
1973		48	8		阿蘇観光ホテル 宿泊先になる	9日から10日にかけて皇太子ご夫妻がご宿泊		
1974		49	5		県営南阿蘇山有料道路の建設工事が始まる	阿蘇南郷谷から 起工式は7月上旬		
1975		50	1	22	阿蘇地方 群発地震発生	立野・戸下間でガケ崩れのため交通不能となる被害あり		
1976		51			湯の谷温泉 新しい水源開発	湯量不足を補う		
1979		54	4		湯の谷温泉 蘇峰館) 解体	古くなったため40年の歴史に幕		
		5			地獄・垂玉 水源温度等の定期観測開始	阿蘇山測候所によって		
1985		60			戸下温泉なくなる	立野ダム建設工事のため、春に姿を消した		
		6	5		阿蘇観光ホテル 宿泊先になる	11日から12日にかけて天皇陛下が19年ぶりにご宿泊		
1986		61			阿蘇国立公園 改名 阿蘇(しゅ)国立公園	13		
					白水温泉	14		
1987		62	3	31	阿蘇観光ホテル 落成式	新館と展望温泉大浴場が完成		
		8	6		榎木温泉 龍牧旅館) 移転新築営業再開	立野ダムに沈むため移転した		
1989		元	7		村営 壁流キャンプ場) 完成	13		
1990		2			久木野温泉センター木の香湯	14		
1991		3	9		火の島温泉 オープン	13		
平成	1992		4	6	21	白龍山橋本寺 移築	小山林館内に建てていた阿蘇三三礼所 白龍山橋本寺)が 立野ダムの建設で水没するため 橋本寺宮壇に移築される	
				10	28	垂玉温泉 匠足(戦)の記念碑の除幕式が行われる	山口旅館敷地内で行われる	
	1993		5	4	3	湯泉センターウイナス 落成式	様々な催しが行われ約8000人が集まる	
				8	1	阿蘇下田城ふれあい温泉完成 落成式	13	
			11	27	榎木温泉 小山林館) 移転新築 落成式 営業開始	立野ダム建設で水没するため		
	1995		7	4	14	阿蘇ファームランド オープン	14	
				7	7	湯泉旅館 朝陽旅館) 落成式	13	
	1997		9	1	15	阿蘇火山温泉 オープン	阿蘇ファームランドに	
				3	21	阿蘇長陽大橋 村道榎木-立野線) 開通式	13	
	1999		11	12	15	阿蘇観光ホテル 閉館	昭和14年7月22日の開業以来60年の歴史に幕を閉じる	
	2000		12	4	8	阿蘇登山有料道路全てが無料化	坊中線 昭和32年開通) 赤水線 昭和40年開通) 吉田線 昭和51年開通)	
	2003		15	4	6	長陽村歩行浴温泉センター完成 落成式	公営温泉ウイナスに	
2005		17	2	13	南阿蘇村誕生	阿蘇郡長陽村・白水村・久木野村が合併		
2008		20	2	29	国民宿舎 南阿蘇)閉館	7		
			5	30	株式会社セルモ 企業進出	温泉付宿泊施設整備を目的に		
		8	30	阿蘇白水温泉 環境 入館者300万人達成	7			
2016		28	4	16	熊本地震 発生	旧長陽村の五温泉は2018年現在も営業停止中		

凡例【項目】■:温泉, ■:交通, ■:災害, □:その他 / 【温泉の名前】■:湯の谷, ■:垂玉, ■:地獄, ■:榎木, ■:戸下